



- 2P アーティスト 工藤 麻紀子さんインタビュー
- 4P リプチンスキー先生×山村浩二氏 特別対談
- 6P 女子美祭2008
- 8P 海外サマー・スクール報告 他
- 9P クローズアップ@女子美祭ファッションショー
- 10P 仲條正義 先生 特別授業、文化政策とCCDセミナー
- 11P バス停とぶどう箱デザインで町づくり 他
- 12P 勅使河原茜さん特別講義、JOSHIBI倶楽部
- 13P 東京デザイナーズウィーク2008に参加 他
- 14P えどがわ伝統工芸産学プロジェクトがグッドデザイン賞
- 15P 文部科学省競争的資金のG/Pに3件採択
- 16P 女子美アートミュージアム展覧会情報
- 17P 100周年記念大村文子基金
- 18P 公募展受賞者紹介、卒業・修了制作展ご案内

Interview ● OGインタビュー
アーティスト 工藤 麻紀子さん

「きりかぶごめん」 2007 oil on canvas 194.0×259.0cm
る友達がいる、連絡を取り合っています。先生方は、結構作品をほめてくれました。「ここはきっとほめて学生の才能を伸ばす大学なんだ」と思っていました、やはりほめられるのは嬉しかったですね。

でも、実は大学1年生の時はやる気がまったく出なくて、ずっと家で寝ていたのです。本当に眠くて眠くて起きられなくて、ほとんど大学に行くことができませんでした。学校に行かないと親が心配するので、朝1回家を出てから、母が仕事に出たところを見計らって、家に戻って寝ていました(笑)。試験の時に、友人が心配してメールをくれましたが、どうしても身体が動かなかった。今でもその友人に会うと、「あの時は本当にひどかったよ」と呆られます。

女子美での心残りは、卒業式に出なかったことです。朝、身体が動かなくて、起きられなかった。そしたら、仲のいい友達も行ってなくて、お互いに駄目だった(笑)。何年かして、卒業式の日に大学に行ったら、みんなでコスプレとかをされていて楽しそうだったので、ちょっと後悔しました。

「こういう絵を描きたい」と思うことができた

このままではいけないな～と思いながら、夏休みになったある日、エレベーターの中にアルバイト募集の張り紙を見つけて、都心にある広告代理店の簡単な書類運びの仕事を始めました。仕事の空き時間が中途半端にあったのが幸いして、その時間を利用

して、『ぴあ』を見ながら銀座周辺のギャラリーをたくさん見て歩くことができました。その時に、出会ったのが今お世話になっている小山登美夫さんのギャラリーです。その頃は、今の清澄白河ではなく、佐賀町にギャラリーがありました。そこで、奈良美智さんやミスターさん、川島秀明さんたちの作品と出会い、絵がすごくきれいで感激しました。それまで絵に対して抱いていたイメージと違って、すごく楽な気持ちになりました。「こういう絵を描きたい」と思うことができ、自分に近い感じがしたのです。

小山さんのギャラリーで、ある日作品の横にきれいな蛾が止まっていたことがありました。「虫が止まっていますよ」と小山さんに言うと、彼が、蛾をそとつかまえて窓の外に逃がしてあげたんです。それまでギャラリーの人って怖いイメージを持っていましたが、「いい人なんだな～」と、心に残りました。当時は、自分が美大生であるとも言わずに、ギャラリーに通っていたので、小山さんは、その頃の私のことはきっと覚えていないと思います。結局、書類運びのアルバイトは半年位続いて、学校よりも時間をつかっていましたね。身体を動かして働くことは苦にならず、その後も肉体労働系のアルバイトばかりやっていました。

こっちの方が楽しいな、と思えた時

その後、だんだんまじめになって、学校に行くようになりましたが、何を描きたいかということは具体的にはっきりしていませんでした。でも、課題とか、やることだけはやっておこう、という気持ちになりました。ある時、課題をやりながら画面のはじっこに女の子の絵とか落書きを描いていたら、「こっちの方が楽しいな」とすごく思って、キャンパスに描いてみました。その絵を、村上隆さん主催の芸術道場というコンテストに出品してみました。するとその作品が、表彰式の時に、小山登美夫賞ですと言われ、突然表彰台に呼ばれて驚きました。足がすごく震えたことを覚えています。

小山さんに名刺を頂いて、それからしばらくして、急に小山さんから連絡がきて、作品を見てもらうことになりました。でも、作品ファイルの作り方もわかりませんでしたし、作品も全部は写真に撮ってないので、当時制作していた彫刻とか、絵を背負って持って行きました。ファイルのページ数が

小山登美夫ギャラリーに所属し活躍しているアーティストの工藤麻紀子さんは、本学卒業生です。物語を感じさせる作品で高い評価を得ていますが、学生時代は、どうしてもやる気が出なかったといいます。アルバイトをしている時に偶然小山登美夫ギャラリーと出会い、自分の描きたいものを見つけ、現在に至るまでのお話を伺いました。



ひたすら眠かった大学1年生時代

私は、高校1年生になるまで、世の中に美術大学というものがあることを知りませんでした。勉強もスポーツもだめでしたが、絵を描くことだけは好きだったので、高校2年生の夏休みに、予備校の夏期講習に行き、初めてデッサンなどの基礎を勉強しました。

今は、女子美に入ってよかったと思っています。のびのびしていて、自由に過ごすことができる学校でした。あまり友人は多くいありませんでしたが、今でも仲良くしてい

足りないので、絵の一部を拡大したりして、本当にダサかったと思います。すごく緊張してうまく話せなくて、挙動不審。小山さんに「対人恐怖症なの？」と聞かれて、「あー私って、対人恐怖症なのかも」とちょっと心配になりました(笑)。その時は特にほめられるわけでもなく終わって、またしばらく経ってから連絡をいただき、グループ展に作品を出させてもらいました。

初めて自分の作品が売れて

大学4年になって、「やっぱり就職か〜」と一瞬は思いました。でも、思っただけで何も考えず、クリーニング工場などのアルバイトをしながら、絵を描いていました。学校では集団行動はまったくできませんでした。それでも自分自身としては絵を描くことが楽しくなって、満足していましたね。夏休みに大学に行ったら、アトリエに誰もいなかったの、「ここで大きい絵を描いちゃえ」と思って、150号の作品を描いて、それが卒業制作になりました。みんなより早く描き上げてしまったので、夏休み明けは、立体の作品をつくり始めました。女子美の洋画は立体も学べるので、学校の林で拾った木などを使って、コツコツつくっていました。立体は削る感触とか匂いとか、やってみるととても楽しかったですね。

「まいご」という卒業制作は、卒業後に村上隆さんが主催した「GEISAI」に出品して、生まれて初めて売れた作品です。その連絡を受けた時、嬉しいと思うよりも前に「あんな大きい絵を買う人がいるんだ」とびっくりして複雑な気持ちでした。しかも買ってくださったのが村上さんだと聞いてまたびっくりしました。村上さんのアトリエを訪ねた時に、飾ってくださっていたので嬉しかったですね。

私は、自分の絵は手元に置いておきたいと思いません。むしろ巣立って、遠くへ行ってくれればいいと思っています。作品は自分を鏡で見るような気持ちで、正直言ってちょっとしんどい。描き終わった作品はじっと見られないのです。

駄目な学生の見本みたいだったけど

初めての個展のことは、あまり記憶にないですね。卒業してしばらくしてからお話があって、びっくりしました。現実感がなくて、本当のこととは思えなかった。在学中に描いた作品などを出しましたが、ほとんど売れてギャラリーの人にも喜ばれて安心しました。

その後も本屋さんでバイトしながら、絵

を描いていました。2回目の個展の時は、作品を一から描きためなければならなかったの、少し自覚は出てきました。今は、意識としてはやはり仕事として絵を描いています。締め切りがないと途方に暮れてしまいます。やはり描いて誰かに喜ばれると嬉しいですね。アパートに住んで作品づくりをしています。作品をつくる場所の問題は結構重要で、作家同士で会うと「家広い？」って必ずお互いに聞き合っていますね。その点、大学の環境はとても恵まれていたなと思います。

個展の時も今でも、小山さんから、何かテーマを与えられたり、何点描くように、というようなことは言われません。自分は本当に駄目な学生の見本みたいでしたが、大学時代、楽しくやれたのでよかったと思っています。1回就職して、社会のこととか勉強すべきだったかなと思うことはあります。でも、就職してもしなくても、絵を本当にやりたければ、絵をやればいのだと思います。

描きたいものが集まってくる

私の描く絵には、具体的な物語はなくて、見る人が自由にお話をつくってくれたらいいな、と思っています。タイトルは、大体描いている途中で思いつくことが多いですね。あまり、タイトルやテーマを決めてから描くことはありませんが、描きながらタイトルが思いつかない時は、大体失敗しています。あと、うまくいかないときは、描き始めるタイミングを間違えたかなと思います。描き進めるタイミングも大切かもし

れないですね。

普段は、いつも落書きみたいにノートやその辺にある紙切れに絵を描いています。大きな作品は、さあ描くぞ!と思わないと描けないので、それとは別にいつも何かを描いています。作品のアイデアを言葉にすることはあまりないですね。そうしているうちに、いつのまにかいろんな描きたいものが集まって来るのです。そこで、描き始めるのですが、そのタイミングが早すぎても、遅すぎてもだめです。描きたいものが完全に集まりすぎても調子が悪いんです。色については、散歩をしながら写真を撮って、それをプリントしたものを眺めながら決めています。私は印刷物が好きなので、雑誌とか写真とか、コピーとか印刷されたものに強く惹かれます。自分の作品も、実物より雑誌に小さく載ってたりすると、ものすごく嬉しいです。そういうのは、何回も何回も見ちゃいます(笑)。

工藤 麻紀子 (くどう まきこ)

1978年青森生まれ。
2002年、芸術学部絵画科 洋画専攻(現絵画学科 洋画専攻)卒。
同年に小山登美夫キュレーションによるグループ展「フラジャイル・フィギアズ」(パレット・クラブ)、村上隆キュレーションのグループ展「東京ガールズプラボ」(ナディック、東京/マリアン・ボエスキー・ギャラリー、ニューヨーク)に出席。その他の主な展覧会に『タイム・オブ・マイ・ライフ 永遠の少年たち』(04年、東京オペラシティアートギャラリー)、『MATRIX213:Some Forgotten Place』(04年、University of California, Berkeley Art Museum & Pacific Film Archive、カリフォルニア)、『Pretty Baby』(07年、フォートワース近代美術館、テキサス)など。

小山登美夫ギャラリー

小山登美夫氏が、1996年にオープンしたギャラリー。東京藝術大学芸術学科出身の小山氏は、西村画廊、白石コンテンポラリーアートを経て独立。村上隆、奈良美智などの現代アートの作家と親交が深く、多くの展覧会を企画・開催している。単独で海外のアートフェアにも積極的に参加し、日本の現代アートを世界に発信しているギャラリーであり、日本の新しいアートシーンをリードしている。また、2007年から「ART AWARD TOKYO」というプロジェクトの選考委員を務め、美大の卒業制作展から作品をスカウトし展覧会を行うなど、若手作家の発掘・育成にも積極的に取り組んでいる。



「まいご」 2001 oil on canvas 182.0×238.0cm

芸術学部メディアアート学科 主催 ズビグニュー・リプチンスキー先生×山村浩二氏 特別対談



10月14日、本学メディアアート学科客員教授であり映像作家のズビグニュー・リプチンスキー先生と東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻教授でありアニメーション作家の山村浩二氏の対談が実現しました。会場には学内外からたくさんの聴講者が集まり、お二人のお話を耳を傾けていました。

まずお二人の作品が紹介され、本学大学院教授の為ヶ谷秀一先生の司会で対談が進められました。ここに対談の一部をご紹介します。

いかに見ている側に作品の世界を信じ込ませるか

為ヶ谷：映画制作でも、アニメーション制作でも、ストーリーテリングが大事だということが最近よく言われています。お二人はどのように考えていますか。

山村：ストーリーというのは、受け止める側によって幅のある言葉なんです。映像は実体のある絵画や彫刻といった、いわゆるファインアートとは違って、見ている時は体感としてその世界を味わうわけですが、見終わってしまうと消えてしまう。見ている時だけ映像の世界というものを感ずるわけですから、そこでいかに見ている側にその世界を信じ込ませ、また作る側はそこに自分の考えや、何を伝えていかなければいけないのかということに、自覚的に指揮するということが、ストーリーテリングという部分では大切だと思います。

為ヶ谷：一方でリプチンスキー先生は、台本もなく即興で映像を作り出しますよね。

リプチンスキー：一般的に映像制作は、台本を準備して、それを撮影して、それから編集するといった手順を踏みます。こうして撮影しながら私が気づいたことは、「カメラの前にある対象物を、撮影する前にビジュアライズした方がもっと面白いのではないか」ということです。そこで、当時私が利用できたあらゆる技術を駆使して、台本をその場で作りながら撮影し、編集し、その場でその結果を見ていくということを始めました。こうして作った作品の方が、伝統的な映像制作よりもずっと興味深いものができると思ったのです。また、こういったやり方が最も実践的で、映像作品における新領域を開拓できる方法ではないかと私は考えています。

為ヶ谷：山村先生はズビグニュー先生の作品を見て、どのようにお感じになりますか。

山村：もちろんいくつかの作品は、そのように即興で作られているというのはすごく共感できます。しかし、例えば僕らが最初に知ったリプチンスキーさんの作品である、「タンゴ」や「4次元」、「メディア」という作品を見たときには、非常に用意周到にシナリオや合成の仕方や、テクニックといったものを考えた上で、緻密に作品を作る作家ではないかなとイメージを持っていたんですが。

リプチンスキー：私は制作に取り掛かる時、構成は決めるのですが、特にストーリーは決めません。映像作品を通して、何かメッセージや、ストーリーを伝えるということは考えていないんです。私はいつも、技術的な実験、ナラティブの実験、言葉の実験といったスタンスで作品制作に取り組んできました。と言うのも、作品を通して何かメッセージを伝えるには、私はまだナイーブすぎると思うんです。急がなくても、自分が言いたいことを伝える作品を作る時間は、まだまだあると思っています。

為ヶ谷：ズビグニュー先生は、山村先生の作品を見てお考えになったことはありますか。

リプチンスキー：日本的な作品で非常に素晴らしいと思いました。幻想的で、何となく写真的なイメージもある、クラシックな手描きのアニメーションという印象を受けました。カフカの作品は、人や空間が歪曲されていて、素晴らしい技術だと思います。



対談の前に山村氏の代表作品が上映されました

山村：ズビグニューさんもカフカについて長編のフィルムを作っているかと思うんですが、ポーランドのお生まれなので、カフカの世界というよりはシンパシーというか、近いものを感じられているのではないのでしょうか。

リプチンスキー：フランツ・カフカ自身については、私は非常に尊敬しています。なぜかという、彼は実験的な文学を書き、そういった文学を確立したいと常に試みてきた方だからです。20世紀にこういった実験的な試みをやっていた芸術家は非常に少なかったのです。

私の作品については、複雑な技術を使って作りました。編集段階というものをほとんどなくして、当時の私にとって、最も進んだ技術を使って作った作品です。



山村 浩二氏

次の新しいステップと作品の質

為ヶ谷：山村先生もグランプリを取られたアヌシーのような国際コンペティションに応募してくる作品というのを、どのような感じでいつも見ておられるのか伺いたいのですが。

山村：2000年以降に、ショートフィルム、アニメーションやコンピュータグラフィックの作品は爆発的に増えました。一つの要

因は、パーソナルコンピュータ、あとはCGの普及で、そういったものを教える大学が世界中に増え、そして学生の作品が増えたことです。

実際にショートフィルムの歴史を振り返ると、ディズニーが世界中を制覇していた時代を経て、60年代の終わりぐらいに、チェコをはじめ各国で国営のスタジオが設立されました。作家性の強い、良質な短編のフィルムが非常に多く作られました。社会主義の崩壊と共にそのような制作も厳しくなり、制作者はより幅広い層に広がっていったのです。彼らの作品の傾向は、一言でまとめられないようなタイプで、それが今、次の新しいステップにどう進んでいくのか、僕は見守っていかたいところです。

為ヶ谷：今年、リブチンスキー先生は審査員の1人としてアヌシーに行っておりますが、今年のアヌシーを見てどうお考えになりましたか。

リブチンスキー：これは私だけの意見ではないのですが、全体的に今年の作品は非常に弱い。グランプリ作品はよくできていたんですが、ただ、内容に新鮮な驚きがあったとか、新しい映画だったかという、そういうことでもなくて、かなり保守的で従来の伝統的な作品でした。

どうしていろいろな学校ができて、新しいテクノロジーがみんな扱えるようになったのに、こういう悪い傾向が出ているのかというと、画像の美学的な観点が1930年代のなんですね。グレーとか白黒の画像が多い。非常に低いレベルの技術を使っている。あと、作品の主役が、ネコとかネズミとかの動物であることが多い。画像的にちょっと醜いというか、あまり綺麗でないと思いました。

世界の将来がどうあるべきかを示す集団になってほしい

為ヶ谷：だいぶ厳しい話もありますが、今日集まっている学生たちに将来に向けて何かメッセージをお願いします。

山村：僕も確かに量の割には非常に質が悪くなっているというのは、リアルな実感なんです。先ほど美学という話が出ましたが、やはりものを作るためには、それぞれが自分自身の美学を確立する必要がある。そういったものが確立しないままに、手軽に画像が作れてしまうという状況が、一つは問題なのではないかなと思います。

やはり本当に気持ちの中に表現したい、何かを形にしたいという思いがないままに、逆にテクノロジーに引っ張られて、何か

ちょっとできるからやってみようというふうな、気軽なところでアプローチしてしまう。それは非常に問題なのではないかと思えます。だから、みんなにはもう一度自分の気持ちの奥の方を見て、本当に自分が何か表したいものがあるのか。その形があるのかということをもっと見つけてほしいと思います。



ズビグニュー・リブチンスキー先生

リブチンスキー：私から皆さんへのアドバイスは、新しいテクノロジーの発展に参画して行ってほしいということです。早く有名になりたいと思っている方、ちょっと辛抱してください。メディアアーティストは、場合によっては何十億もの人にメッセージを届けることができますので、本当に専門分野として極めなければいけない分野なんです。アーティストは世界を批判するためでなく、世界をクリエーションしていくためにいるんだと思います。科学者やコンピュータプログラマー、医者といった社会の他のエリート集団と一緒に、いろいろな新しいテクノロジーに関与して、そしてこの世界の将来がどうあるべきかを示すぐらいの集団になってほしいと思います。社会のアバンギャルドな集団として、世界を美しくしていくために努力をすることは、アーティストにとってとても重要だと思います。

もう一言。現代アーティストにとってコンピュータプログラミングは基本中の基本です。プログラミングの言語というのは非常にシンプルなものなので、みなさん自分のために積極的に学んで、より素晴らしいものを作り出せるよう、プログラミングの可能性を探って行ってほしいと思います。

夢は何ですか？

対談も終わりを迎えようとしたそのとき、会場から質問が。「お二人の夢をお聞かせください」

山村：僕はアニメーションのショートフィルムを作ることにずっと時間を捧げてきたので、やはりそのアニメーションの表現、そのメディアの中での一つの到達点というもの、何とか自分の手で形にしたいなということで、作品を作り続けていきたいと思っています。

リブチンスキー：今後、私が考えていること、見ていること、感じていること、ビジュアライズはできないけれど頭の中で考えているイメージとか、そういったことを対象に、制作していきたいと思っています。本当にたくさん伝えたいストーリーが頭の中にあって、いつもいつも、それをどうやって見せて、どうやってキャプチャーするかといったところが、非常に難しいところだと思っています。

もちろん実験的なことを行っていくこともとても重要だと思います。即興で作品を作っていくということは、人生のように1回しかないライブで生きるということを、こういった芸術的な創作活動の中に採り入れていく、非常におもしろいことだと思うからです。



対談前にリブチンスキー先生の代表作が上映されました

Zbigniew Rybczynski (ズビグニュー・リブチンスキー)

1949年ポーランド生まれ。ウッチ映画大学撮影科卒業。1970年代初頭からヨーロッパ諸国や米国でフィルムディレクターとして活躍。1980年作品「タンゴ」ではアカデミー賞最優秀短編アニメーション賞を受賞。1990年作品「オーケストラ」ではエミー賞特撮部門賞を受賞。米国、日本、およびヨーロッパの著名な映画祭で栄えある賞を多数受賞し、世界的に高い評価を受けている。また、ハイビジョン技術のバイオニアの一人でもあり、最新の技術を使った映像作品を制作。現在、アメリカで製作会社ズビグ・ヴィジョンを主宰。2006年4月より本学メディアアート学科客員教授。

山村 浩二

1964年名古屋生まれ。東京造形大学絵画科卒業。多彩な技法で短編アニメーションを制作。国際的な賞を多数受賞。2002年作品「頭山」が国際アニメーション映画祭の最高峰、アヌシー、ザグレブ、広島をはじめ6つのグランプリを受賞、第75回アカデミー賞にノミネートされる。また2007年作品「カフカ田舎医者」がオタワ、シュトゥットガルト、広島など7つのグランプリを受賞。他の代表作は「カロとピョプブト」(1993)、「バクシ」(1995)、「ジュビリー」(2000)、「年をとった鱈」(2005)など。ヤマムラアニメーション代表、Acme Filmworks契約監督、国際アニメーションフィルム協会日本支部理事、日本アニメーション協会副会長、東京造形大学客員教授、東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻教授。

Festival ● 女子美祭2008

杉並キャンパス

10月24日～26日の3日間、杉並・相模原キャンパスで女子美祭が開催されました。今年の相模原キャンパスのテーマは「羽化」、杉並キャンパスのテーマは「レトロ」です。

相模原キャンパスのゲストはアートディレクターの服部一成さん、「賭博黙示録カイジ」の作者・福本伸行さん、「ブラックジャック

クによろしく」の作者・佐藤秀峰さん、ダンサーの森山開次さん、杉並キャンパスのゲストはアートディレクターの大岩Larry正志さん、ジャパンキルト作家で本学卒業生の服部早苗さんでした。期間中雨に見舞われる場面もありましたが連日大盛況で終えることができました。



Festival

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

相模原キャンパス



International ● ① 2008年度バーミンガム・アート・デザイン学院海外サマー・スクールの報告

学術交流協定大学であるバーミンガム・アート・デザイン学院（イギリス、以下BIAD）において、8月4日から8月29日までの26日間にわたって海外サマー・スクールが実施されました。このスクールは、本学とBIADが共同で企画した美術・デザインの実技授業を中心に構成されており、今年で5回目となります。今回は29名（大学院修士課程1名、芸術学部26名、短期大学部2名）の学生が参加しました。出発までに英国の生活情報に関するオリエンテーションや事前指導、外国人講師による英語研修を約2ヶ月にわたって受講し、スクール参加に備えました。

第1週目 自己紹介プロジェクト+ロンドン文化小旅行



自己紹介プロジェクトでのプレゼンテーション

自己紹介プロジェクトでは、まず、予め準備されたボーリングピンのような石膏柱に“自分”を象徴する絵や柄を描き込みます。これを教員や他の学生に向けてプレゼンテーションし、自分がどういう人物であるのかを紹介しました。

金曜日のロンドンへの文化小旅行では、一日をかけて美術館や歴史的建造物を巡り、英国の歴史と今を芸術という切り口から体感しました。週末にかけてほとんどの学生が滞在を続け、自分だけのロンドン・ディズを楽しみました。

第2週目 トウキョウ・ロンドンプロジェクト+素材実験+ビデオブースプロジェクト

前週の訪問で感じ取ったロンドンとトウキョウの類似点と相違点に着目し、与えられた素材（なんとパン、パスタ麺、お菓子など！）を使って、3グループに分かれて2都市を表現しました。もちろん、プレゼンテーションの後は、みんなでおいしく「いただきます！」。

素材実験は女子美での専攻以外で使われる素材や技法を経験できる絶好の機会です。木、石膏・粘土、テキスタイル（布・糸）、版画での作品制作を試みました。ビデオブースプロジェクトは、各自が自由にテーマを決めて1分間の映像作品をつくる課題です。アニメーション、コンセプトチュアル、実写など、個性的で完成度の高い作品が出来上がりました。



トウキョウ・ロンドンプロジェクトの講評会



素材実験(木工)

第3週目 修了制作

修了制作ではこれまでの授業で体験してきたこと、特に第2週目の素材実験を基に、異なる素材を組み合わせることで集大成の作品を制作します。学生たちは限られた時間の中で、英語でのやりとりにも苦戦しながらも積極的に取り組みました。お菓子の家やゴム素材のドレスなど、海外サマー・スクールならではのユニークな作品が多く見られ、プレゼンテーションの場は楽しいものとなりました。

第4週目 リバプール文化小旅行+修了式

この小旅行ではナショナルトラストに登録されているスピーク・ホール(チューダー調のマナーハウス)、テート・リバプール美術館のクリムト展、英国最大規模の聖堂であるアングリカン大聖堂を訪れました。

最終日はビデオブース・プロジェクトで制作した作品の上映に続き、修了式が行われ、各人に修了証書が授与されました。式の後にはお世話になった先生方と記念写真の撮影をし、別れを惜しまれました。



ビデオブースプロジェクトの作品編集



終了制作プレゼンテーション

International ● ② フィンランドからの留学生

学術交流協定大学であるエプテック応用科学大学アート・デザイン学院（フィンランド）学生のシリ・フォヴィラさんが協定外国人留学生として4月14日から7月22日まで本学芸術学部工芸学科にて学びました。染コース2年次と3年次の授業に参加し、染における日本独自の技法や表現方法への理解を深めました。留学期間終了後の学科主催送別会では、その強い向学精神を称える言葉が彼女に送られました。

シリ・フォヴィラさんの留学レポート



私はフィンランドでテキスタイルデザインを勉強していて、日本でテキスタイルの新しい技法を学びたいと思っていました。私にとって日本はエキゾチックな国で強い関心を持っていて、違う文化や人を知るのが好きな私は今回の日本行きを決意しました。

女子美での勉強はとて面白くて、大学にいたことが好きでした。人々がとても協力的でフレンドリーなので、ここでの生活には驚くほど簡単に慣れることができました。

女子美はエプテックとはかなり違っていました。女子美では技法を学ぶことがフォーカスされているのに対し、エプテックではデザインやコンセプトを考えることに比重が置かれています。自分の視点を変える体験ができたことはとても良かったと感じています。

Close up ● クローズアップ④ ファッション造形学科 3年有志

ファッション造形学科3年生によるファッションショーは毎年恒例、女子美祭の目玉企画です。今年は37人の有志による参加で10月26日に実施され、大成功を収めました。そこでショーの企画を担当した学生5人にお話を伺いました。



左より宮田徳子、北澤友理、高橋涼子、林凡乃、長鶴司

コンセプトは「かたちの たしざん ひきざん」

企画チームは4月から動き出していました。全員にアンケートをとり、皆の気持ちを満足させる内容にするために週2回、放課後に居残りコンセプトを話し合いました。決まったことは「かたちをみせるショーにしよう」ということ。説明しないとおもしろさが伝わらないというものではなく、普段のものづくりからも感じるデザインの良し悪しの感覚を、思考ではなく視覚でみせることに重点を置きました。

普通「かたち」というと物体の輪郭だけを想起します。でも視覚で認識しているのは輪郭だけではなく、人は色や質感によってもその物体が何なのかを判断しています。よって「色」「素材」「形態」その3つが揃って「かたち」であると考えました。

現在のデザインの世界では「よりシンプルに」という風潮があり、「ひきざん」のデザインが良いとされる傾向にあります。ファッションデザインは「たしざん」のデザインも良いとされる分野なのではないかと考え、両方の良さを楽しんでみられるように、自由な発想をつくりだす「かた

ち」の工場というイメージでショーを行うことになりました。

衣装は4つのテーマに基づいています。サイズやボリューム感によって身体の見え方を表現する「シルエット」、襟やカフスなど衣装のパーツで表現する「パーツ」、刺繍やビーズ、テキスタイルプリントを生かしたグラフィカルな展開をする「装飾」、普段は衣装に使わない素材を実験的に使う「素材」。それぞれのテーマの中で「たしざん」「ひきざん」を表現しています。

そしてどの衣装も「たしざん」と「ひきざん」で1セットになっているためモデルは必ず2人ずつで歩きます。ベルトコンベアでモデルを運ぶイメージの会場構成になっており、「たしざん」「ひきざん」それぞれにランウェイがありました。

ショーは人と人との関わり

ショーの準備は普段の授業と平行して行われます。営業チームが企業をまわり協賛金を集め、広報チームがDM・パンフレットの制作発注をし、さらにモデルの管理や資生堂のヘアメイクさんとのやり取りなど、学外へ関わることも多くなり、「企画・運営のやり方、成り立ちがわかる良い経験だった」と宮田さんは語ります。外との関わりを持つことで「友達付き合いとは違う、一つのショーを成功させるというプロ意識が皆の中にあっただと思います」と林さん。「また、全体を見渡さなきゃいけないという、余裕を持つという意識がありました。課題制作は自分だけですが、ショーはたくさんの方が関わっています。自分の仕事の遅れが全体に影響してくるから。」どんどん結束力は固まっていき「頼りになるのは自分と仲間だけでした。一度目のリハーサルの時にあまりにもダメかもしれないと思ったことがあったのですが、それをいいものに変えていくのも自分たち、何もしないでダメ

ファッションショー

にしてしまうのも自分たちで、誰かが良くしてくれるわけではない。これだけお金をかけた大きなことを自分たちだけでするというのは重圧でしたが授業ではできない経験をさせてもらいました」と長鶴さんも続けます。

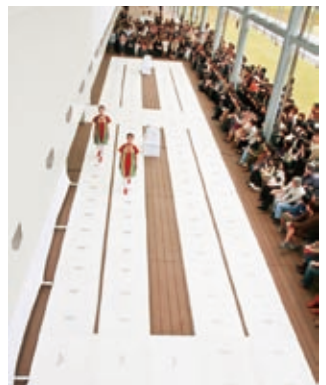
やっと終わった

ショーが大成功に終わり、一番に感じたことは「やっと終わった」だったと語る企画チーム。それだけスタッフ37人を一つのゴールに導くことに気を張って過ごしてきました。「企画という、皆を仕切る立場なので、スタッフのモチベーションを上げること、それぞれの良さをいかに引き出してまとめていかが勉強になりました」と北澤さん。「それにファッションに関して、ものをつくることに関してのディベートをする機会が今までなかったことで、ディスカッションの場になっていたことが良かったです。スタッフにコンセプトを伝え、理解してもらい、いかに全員で感覚を共有していくか。衣装、舞台をはじめとする作業チームの誰かが『わからない』といえはすぐに説明しに行く。そのやりとりを100%でやってきたから形になったのだと思います。その部分を曖昧なままにしていたら、できなかっただろうし、こんなにも充実感はなかったと思います。」そう語る彼女たちの表情はやりきったという自信に満ちたものでした。



スタッフとモデル大集合。おつかれさまでした！

女子美ファッション造形学科研究室ウェブサイト
<http://www.joshibi.net/fashion/>



Lecture ● 2

デザイン学科 客員教授 仲條正義 先生 特別授業

10月9日、10号館1011教室にて、仲條正義先生の特別授業がおこなわれました。授業参加者はデザイン学科の学生26名で、他に聴講のみの参加者が20名いました。授業参加者にはあらかじめ課題が出されており、その完成作品を仲條先生が中心となり同学科教授の奥村毅正先生、准教授の淺野晃成先生、林規章先生らが一点ずつ講評するものでした。

課題内容に対して仲條先生は「自分の若い頃はデザインといってもカラーのプリントもないし、写真の使い方もわからなかったから、自分で絵を描いてそこに文字を入れてポスターを作っていました。絵画などに比べ、デザイン・イラストはまた少し違った世界です。ドキッと胸にくるようなものを描くのは難しいですが、課題としては面白いと思い、イラストレーションを扱う課題にしました。」



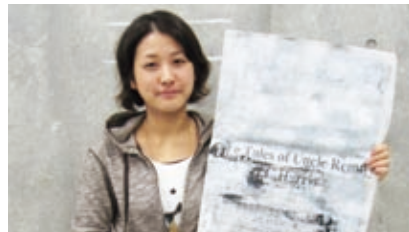
左から林先生・仲條先生・淺野先生・講評を受ける学生・奥村先生

制作の条件は花椿連載中の『アンクル・リーマスの語った話』の7話の中から1話を選び物語の場面・イメージを描くというもの。サイズはB3とし、絵の中にタイトルや著名などの文字要素をデザインして入れること。出典は雑誌だが雑誌掲載の体裁は考慮せず、ひとつのイラスト作品として仕上げるなどがあげられました。

講評会の総評では今回は動物が出てくる物語を選んでのイラストレーションを描くという課題だけに、一般的な動物のイラストをダイレクトに描いてくる学生が多いことを指摘されていました。しかし、だからといって、物語からあまりにもかけ離れた独りよがりの絵を描くというのではなく、100人が見て同じストーリーをイメージできるものでなければならぬとも仰っており、先生のお話を熱心にメモする学生の様子が見受けられる印象的な授業となりました。



熱心に聴講する学生達



最優秀賞をとった3年プロダクトデザインコースの野島三奈子さん。おめでとう！



仲條先生のコメント: 文句無しに良いと思う。味っていうものはこういう所までいかないと駄目なんですよ。
作者コメント: とても楽しかった。課題は何度か作り直して、最後は2日で仕上げた。自分の中で新しい表現方法を発見した。プロダクトデザインを専攻しているので普段使わない部分の脳みそを使って作ったような気がする。爽快感を感じた。

プロフィール

仲條正義 (なかじょう まさよし)

1933年東京生まれ。1958年東京藝術大学美術学部図案科を卒業。資生堂に入社、宣伝部配属となる。1959年同社を退職し、株式会社デスカに入社。1960年フリーランスとなり、のち、株式会社仲條デザイン事務所を設立。主な仕事には、長年手がけている資生堂PR誌「花椿」、ザ・ギンザ、タクティクスデザインのアートディレクション・デザインのほか、松屋銀座、ワコールスパイラル、東京都現代美術館、細見美術館(京都)CI計画、資生堂バーラーのロゴタイプとパッケージデザイン、GRANDUO(立川)のロゴ、東京銀座資生堂ビルのロゴとサイン計画などがある。これまでにADC賞、ADC会員最高賞、ADC原弘賞、勝美勝賞、TDC会員金賞、毎日デザイン賞など多数受賞。1998年には紫綬褒章を受章。

Report ● 文化政策とCCDセミナー〈持続可能な文化発展〉

11月22日に、13号館1312教室で、本学が共催する「文化政策と CCDセミナー〈持続可能な文化発展〉」が開催されました。

グローバル化による生活や文化の画一化が進む現代社会の中で、本当の豊かさとは何かが問われています。一人一人が自分の文化を大切に、同時にこのコミュニティのつながりのなかで生きていくことができる社会づくりが求められています。こうしたなか、アートの力を活かし、人と人を繋ぐ、コミュニティを再生させる取り組みが始まっています。セミナーの基調講演では、1970年代からこの問題に取り組んでいるオーストラリアの多様なコミュニティに対するアートを通じた支援活動が紹介されました。また日本においても文化政策のなかで、こうした取り組みがどう位置づけら

れるか、そして人間が生きやすい未来、公共をつくるうえで、アートは何ができるのかについて、4名から報告がありました。中でも、韓国からの留学生の本学芸術学科4年の辛 恩僖さんが、本国での体験から日本で学んでいるということ、韓国の障害者の状況を報告しました。また、女子美がこれまでに取り組んできた創造的解決の記録を紹介展示しました。

(芸術学部 芸術学科教授 面出 和子)

※ CCD(Community Cultural Development: コミュニティの文化による発展)
オーストラリア・カウンシル(Australia Council for the Arts) が提唱し、コミュニティアートの実践から発展しました。ここでいうコミュニティとは、文化的背景や興味、関心によるコミュニティ、または地理的なコミュニティを指します。オーストラリアでは、アボリジニや移民、性的マイノリティ、障害のある人など、これまで社会から排除されがちであった人たちの文化的生活をアートの力によってエンパワーメントし、発展させていくことが政策によって支援されています。

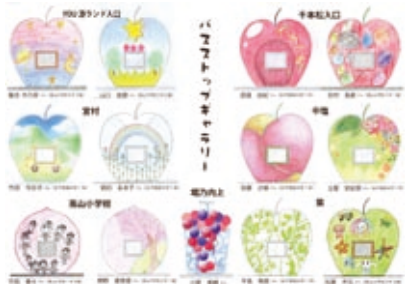


辛 恩僖さん(芸術学部芸術学科4年)



Topics ● ① バス停とぶどう箱デザインで町づくり

本学と長野県高山村、須高ケーブルテレビが長野県高山村の活性化とあらたな町づくりを目指し事業展開をすすめている産学官連携事業、高山村プロジェクト。2006年から、高山村をフィールドとして村の原資源である自然や環境、観光、温泉、農業などを、アートやデザイン・映像などで表現してきました。3年目にあたる2008年



今回採用されたバスストップデザインの原案、女子美生の作品は7点入っている

は村内7ヶ所のバス停の外壁が色あせてきたため、新しいデザインで描きなおしました。外壁のデザインは高山小学校、高山中学校の生徒と本学の学生から募集を行い、創造性に溢れる約300点の作品から審査を行ない、13点のデザインを決定し、メディアアート学科の1年生約80人が8月末と9月初旬の2回にわたり高山村を訪れ、小学生、中学生とともにペイント作業を行いました。バス停内には、バスの待ち時間に高山村のポスターや美術作品などを楽しめるコーナーも設置されています。

また、JA須高高山支所ぶどう部会より、ぶどうを入れる化粧箱(2kgと4kg)のデザインを依頼され、メディアアート学科3年生の柳澤杏奈さんと高梨瑛美子さんのデザイン作品が採用されました。2008年の秋から実際に使われています。



地元の小学生たちと一緒に作業



左より化粧箱 2kgデザイン:柳澤杏奈さん
4kgデザイン:高梨瑛美子さん

Topics ● ② 第2回こどもアニメーションフェスティバル開催



子どもたちに見てほしいアニメーションと、子どもが作ったアニメーションをテーマにした、こどもアニメーションフェスティバルが、女子美祭期間中の10月26日、女子美術大学で開催されました。全国からの応募作品は56点に達し、その中から選考した作品19点が上映されました。アニメーション作家の古川タクさん、女子美卒業生でイラストレーターの水谷さるこさん、音楽家のイトケンさん(写真左より順)の3名の審査員による厳正なる審査の結果、グランプリと3名の優秀賞が選ばれました。

また、招待作品としてフランスのアニメーションスタジオ「Folimage」の作品、活躍中の女性作家の作品も上映されました。



Topics ● ③ メディアアート学科卒業制作が世界各国で上映

2008年メディアアート学科卒業生の卒業制作作品が世界各国の短編映画祭やアニメーションフェスティバルでコンペティションにノミネートされ上映されました。



「カベとボク」:川崎杏子(芸術学部メディアアート学科卒)立体アニメーション
 ■第8回ラビュタアニメーションフェスティバル:東京/日本 パノラマ部門上映(2008.3.20-23)
 ■第6回芸術科学会展:東京/日本 デジタル映像部門最優秀賞(2008.3.28)
 ■ANONIMUL International Independent Film Festival: ストクトゲルゲ/ルーマニア フィクション&ショートアニメーション部門ノミネート(2008.8.11-17)



「きのこのショコラ」:小泉雅恵(芸術学部メディアアート学科卒)立体アニメーション
 ■第8回ラビュタアニメーションフェスティバル:東京/日本 パノラマ部門上映(2008.3.20-23)
 ■第6回芸術科学会展:東京/日本 デジタル映像部門入選(2008.3.28)
 ■ANONIMUL International Independent Film Festival: ストクトゲルゲ/ルーマニア フィクション&ショートアニメーション部門ノミネート(2008.8.11-17)
 ■CONCORTO Film Festival: ボンテヌーレ/イタリア CONCORTO Kids ノミネート(2008.8.27-31)
 ■第3回札幌国際短編映画祭:札幌/日本 特別上映(2008.9.10-15)
 ■VII Open St.Petersburg Student Film Festival "Beginning": サンクトペテルブルク/ロシア コンペティションノミネート(2008.9.25-30)
 ■The Carrousel international du film de Rimouski: リムスキー/カナダ コンペティションノミネート(2008.9.28-10.5)
 ■International Film Festival For Children And Young

Audience "Schlingel": ケムニッツ/ドイツ アニメーション短編コンペティションノミネート(2008.10.13-19)
 ■Uppsala International Short Film Festival: ウプサラ/スウェーデン 子供部門コンペティションノミネート(2008.10.20-26)
 ■International Festival of Animated Film Banja Luka: バンジャールカ/ボスニア・ヘルツェゴビナ パノラマ子供部門上映(2008.10.22-27)



「Precious place」:高橋枝花(芸術学部メディアアート学科卒)平面アニメーション
 ■International Odense Film Festival: オーデンセ/デンマーク 子供部門ノミネート(2008.8.19-24)
 ■FRESH FILM FEST: カルロピ・バリ/チェコ パノラマ部門上映(2008.8.27-31)
 ■Auburn International Film Festival for Children and Young Adults: シドニー/オーストラリア Taddell's Bluebell 名誉賞ノミネート(2008.9.15-19)
 ■IX. Biennial of Animation Bratislava: プラティスラバ/スロバキア コンペティションノミネート(2008.10.14-18)

Lecture ● 3

ファッション造形学科主催 草月流家元 勅使河原 茜さん 特別講義

12月2日、10号館1011教室でいけばな草月流第四家元、勅使河原茜さんの特別講義が行われました。

草月流についての説明がなされたあとは、家元による、いけばなを実演しながらの講義となりました。会場をぐるりと囲むように用意された6つの花器にそれぞれの表情で手早く花をいけていくその力強いパフォーマンスに会場は熱気に包まれました。「勿論、植物は普通に生えている状態が美しくて力強いのですが、そこに人の想いを込めるのが『いけばな』。でも植物を無視してはいけません。自分の思ったとおりにしようとしてはいけない。左に向かせたくても

右を向いた状態の方が美しかったりもします。生きていますから。その環境の中で一番美しいところを見つけあげられることが一番大事です。」と語られました。

最後に家元から学生へのメッセージとして「今日のこのちょっとした時間でいけばなの概念が変わっていただけたら光栄に思います。量の上で大人しくお花を飾るといものだけではないのです。創造するということは楽しむことが一番。皆さんも作品を作っているときは怖いけど楽しいとか、挑戦しようとか、いろいろ葛藤があるでしょうけど、私たちも植物と向き合って、どうすれば美しく存在させることができる

のか日々考えております。いけばなは堅苦しいものではないのでこの日をきっかけに、花屋さんを覗いてみたり、いけばなの展覧会に足を運んでみたりしてみてください。」とお言葉もいただき、学生にとっては今まで窺い知ることのなかった世界を体験できた有意義な講義となりました。

プロフィール 勅使河原 茜 (てしかはら あかね)

いけばな草月流第四家元。
1960年、三代家元で映画監督でもあった勅使河原宏の次女として生まれる。
2001年家元継承。「自由な創造」を大切に草月のリーダーとして、みずみずしくおらかないけばな作品を国内外で精力的に発表する一方、多様化する生活スタイルにふさわしい新しいいけばなの可能性を求めて、公共空間や商業スペースでの作品制作、能やバレエの舞台美術など多方面で創作活動を展開。植物から得たインスピレーションをもとにジュエリーデザインも手掛けている。また、幼稚園教諭の経験を生かして、いけばなを通じて子どもたちの感性と自主性を育むことをめざす「茜ジュニアクラス」を開講し、指導に力を注いでいる。
【主な著書】
花のプリズム (草月出版/1995)
IKEBANA EXPRESSIONS (主婦の友社/1996)
小さな花 (草月出版/1998)
草月の花・新しいいけばなの提案 (主婦の友社/2001)
私の花 (草月出版/2007)
はじめての花絵本 あかいはなのほん、ピンクのはなのほん (講談社/2008)



次々と創りだされるいけばなの世界に息を呑み魅入る学生たち



竹を割って組むなどのダイナミックなパフォーマンスもあった正月をイメージした作品

Topics ● 4 JOSHIBI倶楽部・トークinギャラリー「アートへご招待」

美術やアートの魅力を広く社会に伝えようと、若者たちで賑わう原宿・表参道ヒルズにある「Galerie412」を会場に、6月14日、10月31日、11月29日の3回にわたり、JOSHIBI倶楽部「アートへご招待」と銘打ったトークショーを開催しました。初回「アートに癒されてー医は美術なりー」は、ヒーリングアートの分野で活躍中の山野雅之先生を囲んで、人々の心に癒しを与えたり、元気づけたりする美術・アートの働きをテーマに。第2回「コミュニティとアートーアートに何ができるかー」では、11月22日に相模原キャンパスで開催さ

れた「文化政策とCCDセミナー」のイベントを兼ねて、アートプロデューサーとして著名な北川フラム先生に、地域の活性化やコミュニティの再生に向けた芸術文化、アートの可能性を。第3回「アートのゆくえー美術は何処から来て何処へ行くのかー」では、美術評論家の北澤憲昭先生と杉田敦先生により、現代美術を中心に美術界の状況や今後のアートの展望について、それぞれ30名ほどの聴衆を前に、サロン風な雰囲気の中で楽しいお喋りが繰り広げられました。大学では今後も社会活動の一環として、話題性のある魅力的なテーマを

設け、女子美の「今」を社会に発信していきたいと考えています。

(芸術学部 基礎教養系教授 稲木 吉一)



第2回「コミュニティとアートーアートに何ができるかー」の様子

Topics ● 5 「J NOTE」販売開始!!

女子美オリジナルノート、その名も「Jノート」が発売になりました。シルバーの表紙には女子美の校章、そして「JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN」の文字が型押しされています。大・中・小と種類も豊富で、いろいろなシーンで活躍そうです。

「Jノート」は各校地の売店で販売中。皆さん、売店をのぞいてみてください。



大 550円・中 400円・小 250円

Topics ● 6

インテリアトレンドショー第27回JAPANTEX2008 「クリエイターズタウン」に出展

11月19日～22日、東京ビックサイトにてインテリア業界を代表する企業が世界から集う国際産業見本市 JAPANTEX が開催されました。この中で行われる恒例のイベント「クリエイターズタウン」は国内外の32校でテキスタイルを専攻する学生たちが、企業や団体から提供された3つの素材（糸、段ボール、フェルト）から平面、立体、半立体の作品を制作してプレゼンテーションするものです。今年のテーマは「陰影礼讃」でした。本学からは芸術学部工芸学科、短期大学部専攻科造形専攻工芸デザインコースが参加しました。

【芸術学部工芸学科】

「JOSTLE」

コンセプト

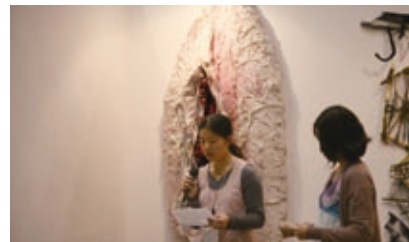
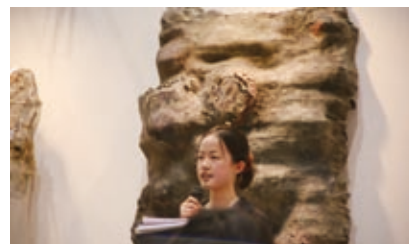
人間の身体・行動を突き動かす「精神・心」を作品に表現した。人々は感情や意思をぶつけあい、理解しあう事で生きていく。経験は、良くも悪くも全て自らの財産となり、人生の糧になる。その深く豊かな「精神・心」を大切に思う。精神的葛藤や様々な感情を、異なる素材による凹凸、その奥行きや陰影で表した。また、異なる個性を持つ人々が共存していく意味を込めて、様々な色が合わさる事で生まれる深みのある黒で表現した。

【短期大学部専攻科造形専攻工芸デザインコース】

「肉芽」

コンセプト

「肉芽」とは、苗床を使って生まれてくる生命の芽の事を言います。今まで主として存在していたものをじわじわと陰へ追いやる存在は、小さいながらもとても大きな存在です。しかし、やがてその小さな芽も成長し成熟すると、陰へと還りくたびれ、次の生命体へと吸収されます。この作品では、その持つ熱いエネルギーが陰影（うち）から溢れる様子を表現しました。



Topics ● 7

東京デザイナーズウィーク2008に参加

10月30日～11月3日、明治神宮外苑中央広場に於いて東京デザイナーズウィークが開催されました。（来場者7万5千人）今年度から学生作品展示ブース「100% futures」がテント内で開催され、デザイン全般の展示が可能になりました。「100% futures」では5つのテーマがあら

かじめ用意されており、「触れる」「安らぐ」「食べる」「動く」「守る」の中から自由に選択できました。そこで環境デザインコースは課題内容と一番テーマに近い「安らぐ」を選択し、作品展示の他に『粒子』をテーマに安らぎを感じるブースの展示を行いました。またプロダクトデザインコースでも

「安らぐ」イスをテーマにしたブースを出展し、メディアアート学科は「触れる」をテーマに掲げたインタラクティブアート作品のブースを出展しました。他にも産学協定のプロジェクトにデザイン学科の学生が参加するなど、例年にも増して盛りだくさんな印象となりました。



デザイン学科環境デザインコースブース



デザイン学科プロダクトデザインコースブース



メディアアート学科ブース

Topics ● 8

吉祥空園soraの展示

吉祥寺伊勢丹 FFビルの3階に屋上庭園「吉祥空園 sora」が、2006年11月オープンしました。その中の「アートスペース」を財団法人武蔵野市開発公社のご好意により本学が借りることができ、昨年12月より展示をおこなっています。今までの展示は、井上尚子さん（大学院美術専攻版画修了）、桜井龍さん（デザイン学科助手）、常盤美賀さん（大学院美術専攻立体芸術2年）、金子ひとみさん（大学院美術専攻立体芸術2年）、デザイン学科4年生（プロダクトデザインコースの学生9名）、田村俊明先生（デザイン学科教授）の6期です。来年度も4期の作品展示が予定されています。とても綺麗な武蔵野のイメージの庭園です。お

近くにお出掛けの時はぜひ、お立ち寄りください。

（なお、展示希望の方はデザイン学科田村俊明教授までご連絡ください。）



井上 尚子

桜井 龍

常盤 美賀

金子 ひとみ

プロダクトデザインコース4年生

田村 俊明

NEWS ● ① えどがわ伝統工芸産学公プロジェクトがグッドデザイン賞

この度、えどがわ伝統工芸プロジェクトの活動が2008年度グッドデザイン賞を受賞しました。このプロジェクトは、女子美術大学・東京造形大学・多摩美術大学の3大学が江戸川区と江戸川区の伝統工芸者



と連携し、新しい製品の開発やPRの支援を行うものです。

グッドデザイン賞は一般的に「もの」が受賞しますが、今回は活動そのものが受賞しました。(カテゴリー：新領域【先駆的、



実験的なデザイン活動)】

この受賞は、えどがわ伝統工芸プロジェクトが先駆的、実験的なデザイン活動として、社会的・客観的に高く評価されたことを意味しています。



東京デザイナーズウィークedogawa3出展時の様子

NEWS ● ② 2009年ヴェネチア・ビエンナーレ 日本館コミッショナーは南島宏教授に

10月16日、第53回ヴェネチア・ビエンナーレ美術展の出品作家の発表があり、芸術学部芸術学科の南島宏教授が企画案を出した、やなぎみわ氏の「Strolling Party—老少女劇団」(仮題)が出品されることが決定しました。ヴェネチア・ビエンナーレの日本館の展示企画は前回からコンペ形式で決定することになっています。国際交流基金が指名したコミッショナー候補がそれぞれ1名の出品作家を選んで展示企画案を応募し、その中から1名の企画案が選出されます。今回は榎木野衣氏よりヤノベケンジ案、光田由里氏より野口里佳案、南雄介氏より中村一美案が提出された中から南島教授のやなぎみわ案が選出されました。

「コミッショナー候補として話を受けた瞬間にやなぎみわ案が頭に浮かんだ」と話す南島教授。その展示案は、日本パビリオ

ンそのものをテントで覆うというもの。「パビリオンを本来の姿に戻す、という意味もあります。元はハレの場の仮設展示物であるのに、なぜか半世紀以上同じ公園にあり続けているのですから。」とやなぎ氏。内部は、天井に届きそうな巨大なフォトスタンドに入ったジオラマを用いた老女と少女のポートレートを展示するという構想です。



外観イメージ ©Miwa Yanagi 2008

また写真のほかに映像作品も展示予定とのことで、映像の中では老若が混じり合い、時間軸や老若という二項対立から解放された空間を作りたいと話されていました。

開催期間は2009年6月7日～11月22日です。ぜひベニスまで足を伸ばしてみてください。



左:南島 宏教授 右:やなぎみわ氏

Topics ● ③ 日本最大級の環境展示会 「エコプロダクツ2008」学生有志が参加

12月11日～13日の3日間、東京ビッグサイトにておこなわれた「エコプロダクツ2008」内の「アルミ缶リサイクル協会」ブースにおいて、芸術学部2年生学生有志23名による作品が展示されました。

映画『ウォーリー』とタイアップして飲料の使用済み空き缶におけるリサイクル意識を向上させることを目的とした企画で、本学をはじめ、千葉工業大学、東京造形大学の3大学がそれぞれのコンセプトで“アルミ缶ウォーリー”を制作しました。

荒木 美由さん
(芸術学部立体アート学科2年)

本作「つなぐ」は、ごみとして普段扱われているアルミ缶が、ウォーリーによって徐々に美しく変化していき芽を出す(自然に還る)様を表現しています。

映画「WALL・E/ウォーリー」の主人公であるウォーリーをモチーフとしています。実物を忠実に再現するのではなく、ウォーリーからイメージする立体作品を制作しました。金属溶接やバスケットリー(編み組によるカゴの技法)など、さまざまな技法を用いています。



Topics ● 10 文部科学省競争的資金のGPに3件採択

2008年度に女子美術大学の各取組プログラムが、3件のGPに採択されました。文部科学省が定めるGPとは Good Practice:優れた取組を指します。この採択により本学は重点的な財政支援を受けることができ、より充実した教育環境が整います。

学生支援 GP 学生支援 GP 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム

「美大でのリエゾン型キャリア形成支援プログラムの展開…キャリアポートフォリオを携えてソーシャルデビュー…」

学生の学習支援とキャリア教育：女性のキャリア形成支援を実践する美大教育

地域や他の教育機関、卒業生、企業などと連携することで美大を卒業する学生が生涯を通してキャリア形成をおこなえるよう支援するものです。学生全員に作品ファイル「ポートフォリオ」を作ることを義務づ

け、それをアーカイブ化した電子ポートフォリオを開発します。学生はそこに学習・制作上の問題を書き込み、それに対して教員が助言を与え、その履歴をデータ化していくことで、教職員による全学的な

キャリア支援が可能になります。また企業や卒業生が実務の現場から実践的な教育サポートを施せるシステムの導入も視野に入れています。



File?展第2回…一つのファイルが、わたしをまるごと抱えている(芸術学部洋画研究室)

この展覧会では、各専攻の女子美生の記録集、資料集を「ファイル」として展示しました。表現者にとつての『作品ポートフォリオ』の実現性と社会との関係性を問いつけています。自己表現と社会性獲得という原点発見の取組でもあります。2007年9月27日～10月19日迄、女子美術ミュージアム(JAM)ロビーにて開催しました。



JOSHIBI rainbow award

卒業制作の選抜学外展として2006年度から実施している「女子美スタイル☆最前線」。2007年度には「rainbow award」という賞を設け、出展した作品の中から、表現者としての可能性を感じさせる、感性、才能、問題意識をもつ作品に対して授与しました。作家として今後社会の様々な立場からの評価に晒されるようになる学生の第一歩です。

大学院 GP 大学院教育改革新プログラム

「表現空間創出による高度人材育成と職域開発…実践的プラットフォームとアートセンター機能による大学院の実践主体化…」

大学院を実践的プラットフォームとした高度人材の継続的育成

大学院を、社会から切り離された研究の場ではなく、実践の場となるよう大学院生の自発的な活動を資金面などからサポートしていくことと、そこで実践的に学んだ大学院生が大学院を修了したあとに活躍でき

る職業の領域を広げていくことを目指すプログラムです。具体的には大学院生によるワークショップ、イベント、プロジェクトなどの活動を促すこと。批評、討議、編集などをおこなう場を増やすこと。そして活

動記録のアーカイブ化などを進めることで、エディター、アート・ライター、展示やワークショップのコーディネーター、教育プログラム・ディレクターなどの仕事ができる人材の育成を目指します。



ACP(artist-critic program)

ACPは、2007年度から実施されている批評実践プログラムで、学内外の実技系学生から募集したアーティストが作品のプレゼンを行い、それを芸術表象ゼミの院生が批評するという試みです。批評は、プレゼンそのものに対して行われ、批評を検証する場として、「批評の批評」を行うのも特徴です。2008年度から、プレゼンに対する批評を具現化する展覧会の企画・運営も行っています。



CLOSET

「CLOSET」は、2007年、批評誌として本学大学院修士課程芸術文化専攻の大学院生により創刊されました。当初は、ACPの活動報告書として位置づけられていましたが、より広く批評を推進するメディアとして、積極的にインタビュー、特集などを企画しています。

教育 GP 質の高い大学教育推進プログラム

「素材と環境教育が促す日本ブランドカの発信…素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラム…」

環境とは生きること。アートとデザインにより日本から世界へと貢献する国際力を持つ人材育成を行う

素材教育と環境教育の実践によって、学生の柔軟な発想や創造的な思考力をデザインへ応用し、デザイン力を学内から国内へ、

さらに国内から海外へと発信していく取り組みです。持続的に発展可能な社会づくりを担える人材の育成と、素材に着目するこ

とでより大きな観点から地球環境を捉え、循環型の社会を形成することのできる人材の育成を目指しています。



半原繊維産業プロジェクト

ファッション造形学科の学生が、神奈川県を代表する繊維の産地、半原のさらなる飛躍と地域の活性化を目指した活動に取り組んでいます。2003年度にスタートしたこの活動、本年度は新製品の開発に取り組みました。地域大学生から構成されるマーケティングチームによる市場調査に基づき、本学学生がデザイン・パッケージを提案。試作品の製作や、パッケージ・価格・販路・販売方法の提案、検討を経て、市場性の高い新製品の開発に成功しました。



日本手拭 B 反プロジェクト

工芸学科、ファッション造形学科の学生が、日本独自の染色法である注染(ちゅうせん)に着目し、B反という織り傷やスリの反物に注染を施し日本手拭の質感の良さや手触りをアピールした実践的プロジェクトです。明治40年頃に始められた型染の一種で、「重産ができる手仕事」として評価される世界でも類を見ない独特の技術です。この技法を正式に高等教育機関で授業展開するのは本学芸術学部工芸学科のみです。

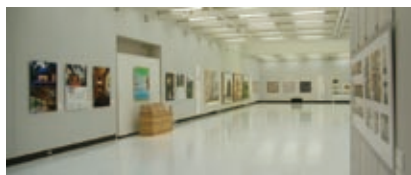
J A M ●●● 女子美アートミュージアム 展覧会情報

JAM展覧会報告

平成20年度 女子美術大学 女子美術
大学短期大学部 退職教員記念展

本年度で定年退職される実技系の7名の教員による展覧会。赤沼國勝先生、木下道子先生、見城美子先生、嶋剛先生、高間夏樹先生、瀧本英男先生、立石雅夫先生それぞれの専門分野の多種多様な作品を展示しました。会期中に行った嶋先生、高間先生のギャラリートークには、学生、卒業生を含めて約200名が集まり、大盛況のうちに終わりました。

(2008年9月17日～10月26日)



JAM展覧会予告

平成20年度女子美術大学大学院修了制作作品展

平成21年3月に大学院を修了する学生の修了制作を約50点展示します。

※2008年11月4日～2009年3月8日は、収蔵作品整理のため、長期休館いたします。

第30回造形さがみ風っ子展

今年も相模原市内小・中学校の子ども達の多彩な作品が一堂に展示されました。今年は11校が出品し、連日たくさんのお子様を迎え、にぎやかな会場となりました。

(2008年10月30日～11月3日)



第3回 File?展

今年で3回目となる洋画研究室企画の「File ?」展がロビーにて開催されました。70名を超える女子美生から応募された作品はどれも力作で、見ごたえのある展示となりました。

会期中には授賞式も行われ、美術館からは「館長賞」として伊勢克也館長の作品集を、「JAM賞」としてオリジナル手ぬぐいを、各受賞者に贈りました。

(2008年12月4日～12月12日)



ガレリアニケ展覧会報告

女子美ガレリアニケとは、若手女性作家を中心に、女性をテーマとして作家や作品などを取り上げるだけでなく、教員をはじめ芸術学部・短期大学部、同窓生から公募した企画を中心に、展覧会、パフォーマンス、ワークショップ、トークショーなどを開催しています。

Looking In and Looking Out (side the Box)ー見る、そして見る。ー

後藤 富美子 (芸術学部芸術学科造形学専攻卒) の展覧会。

企画: 伊勢 克也 (短期大学部造形学科デザインコース教授)

(2008年8月23日～9月12日)

小野克子展 ー油彩・ドローイング・版画ー

小野 克子 (芸術学部絵画学科洋画専攻准教授) の展覧会。

企画: 上葛 明広 (芸術学部絵画学科洋画専攻教授)

(2008年9月22日～10月3日)

女子美×電通 人権アート・プロジェクト ポスター展

企画: 川口 吾妻 (芸術学部メディアアート学科教授)

伊勢 克也 (短期大学部造形学科デザインコース教授)

(2008年10月6日～10月10日)

gender game

卒業生、在学生によるジェンダー、セクシュアリティへのアプローチ企画

企画: 杉田 敦 (芸術学部基礎教養系准教授)

(2008年10月14日～10月31日)

Works 7x7 in NIKE ー立体ー展

14名の作家による立体作品展。

企画: 仙石 克巳 (芸術学部芸術学科教授)

(2008年11月5日～11月28日)

1517,806km 沖縄県立芸術大学彫刻専攻×女子美術大学立体アート学科交流展

企画: 平戸 貢児 (芸術学部立体アート学科教授)

(2008年12月2日～12月26日)

ガレリアニケ展覧会予告

はっぴい♥ぱんつ

櫻井 彩 (芸術学部メディアアート学科卒) の展覧会。

企画: 羽太 謙一 (芸術学部メディアアート学科教授)

(2009年1月6日～24日)

NEWS ●●● 蕪崎大村美術館が蕪崎市に寄贈されました

本学の理事長である大村智氏が館長を務める「蕪崎大村美術館」が2008年10月1日、所有する美術品とともに山梨県蕪崎市に寄贈され、「蕪崎市立大村美術館」として新しいスタートを切りました。

10月1日に行われた再オープンの記念式典には横内蕪崎市長をはじめ、多くの関

係者が集まり、新しい市立美術館の誕生を見届けました。「優れた美術品は人類全ての共有財産」という開館当初のお言葉通り、大村理事長はこの式典で、今後もこの美術館が多くの方に親しまれ、気軽に立ち寄れる美術館になってほしいとお話されました。



NEWS ● 4 100周年記念大村文子基金

創立100周年記念事業の一環として、「100周年記念大村文子基金」は、平成11年に大村智理事長夫妻からの寄付を基に、文子令夫人のお名前をいただいて設立されました。この基金によって運営されている「女子美パリ賞」(第10回)、「女子美ミラノ賞」(第2回)、「女子美制作・研究奨励賞」(第8回)、「女子美美術奨励賞(留学生対象)」(第7回)、そして本基金の目的のために功績のあった者、及び団体に贈られる「大村特別賞」が以下の方たちに授与されました。

■平成21年度 女子美パリ賞

[パリ国際芸術都市のアトリエ利用権/副賞 100万円]

石橋 恵美

平成6年 女子美術大学付属高等学校卒業
平成8年 短期大学造形彫塑専攻卒業



「七色飛行人」H250×W130×D150cm/F.R.P./2006年
Photo: 斎藤 さだむ

■平成20年度 女子美ミラノ賞

[ミラノの本学借上げマンションの貸与/副賞 各20万円]

重藤 楨子

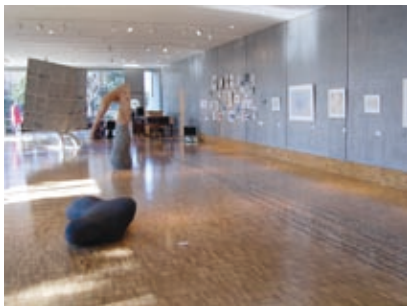
芸術学部工芸学科4年次在籍



「nekojarashi」90×180cm/ウール/2006年

青野 素良

大学院美術研究科修士課程デザイン専攻
ファッション造形研究領域2年次在籍



「principal」JAMロビーラウンジ/2007年

■平成20年度

女子美制作・研究奨励賞

[副賞 各20万円]

小野 さおり

平成16年 芸術学部絵画科洋画専攻卒業
平成18年 美術研究科修士課程美術専攻洋画領域修了



「青い鳥」162.1×130.3cm/キャンバス、油彩/2008年

藤井 聡子

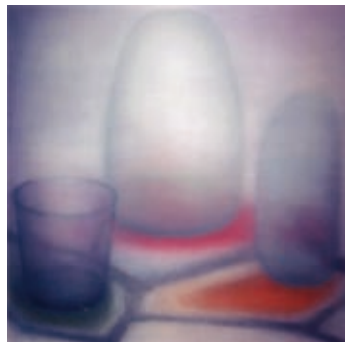
平成9年 芸術学部絵画科日本画専攻卒業
平成14年 東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程
文化財保存学保存修復日本画修了



「陣轡」100×100cm/キャンバス、油彩/2007年

堀込 幸枝

平成12年 女子美術大学付属高等学校卒業
平成16年 芸術学部絵画科洋画専攻卒業
平成18年 美術研究科修士課程美術専攻洋画領域修了



「position」162×162cm/キャンバス、油彩/2007年

■平成20年度 大村特別賞 [副賞 記念品]

受賞団体 「協阪克二展実行委員会」 委員長 大澤 美樹子

展覧会名「北欧の夢 ニューヨークの洗練 日本の情緒 協阪克二テキスタイルデザインの世界」
会 期：平成20年5月17日～6月29日 (女子美アートミュージアム開催)

【選考理由】

本学卒業生・教職員・学生達が相互の専門分野を生かし、一致団結した協働体制により、本展覧会を成功へと導いた。また、展覧会に付随する企画イベントを通して国内外の企業・専門家との異文化交流、あ

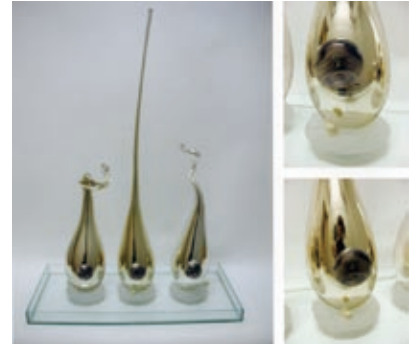
■平成20年度

女子美美術奨励賞(留学生対象)

[副賞 各10万円]

受賞者 Patricia Bermudez Bagniewski

大学院美術研究科修士課程美術専攻工芸研究領域2年次在籍
国籍 ブラジル



「message in a bottle」60×40×70cm/キャストガラス、吹きガラス、写真、鏡/2008年

金 侖正

芸術学部立体アート学科2年次在籍
国籍 韓国



「evolution」40×27×15cm/石灰岩/2008年

蔡 知垠

短期大学造形学科デザインコース1年次在籍
国籍 韓国



「CHAE JI EUN」27×35×27cm/フィルム、スチレンボード/2008年

Topics ● 11 公募展受賞者紹介

第44回神奈川県美術展

【平面立体部門】

準大賞

廣瀬公美(大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域1年)

ユニアート賞

池田巴奈(大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画研究領域1年)

【工芸】

美術奨学会賞

金子ひとみ(大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術研究領域2年)

第34回現代童画展

入選

佐藤茜(大学院美術研究科修士課程美術専攻立体芸術領域2年)

「世界絵画大賞」

国際展賞

黒木南々子(大学院美術研究科修士課程美術専攻絵画領域1年)

JFW JAPAN CREATION 2009A/W テキスタイルコンテスト 入賞

三原瑞葵(大学院美術研究科修士課程美術専攻工芸領域織コース1年)

広瀬菜月(芸術学部ファッション造形学科4年)

本田絵里香(芸術学部ファッション造形学科4年)

第46回 朝日陶芸展

入選

小森谷薫(大学院美術研究科修士課程美術専攻工芸領域陶コース1年)

第14回 真綿のヴィジュアル・アート 公募展

入選

高田文(芸術学部立体アート学科3年)

第85回 春陽会【絵画部】

奨励賞

中臺ゆう子(短期大学部造形学科美術コース絵画研究生)

Topics ● 12 卒業制作展・修了制作展のご案内

学内卒業・修了制作展のお知らせ

●女子美術大学・女子美術大学短期大学部 卒業制作展
芸術学部：相模原キャンパス
日時：3月13日(金)～3月16日(月)10:00～16:00
短期大学部：杉並キャンパス
日時：3月13日(金)～3月15日(日)10:00～16:00

学外卒業・修了制作展のお知らせ

女子美スタイル☆最前線
日時：2月11日(祝)～2月15日(日)
12:00～19:30(入場は19:00まで)
会場：BankART Studio NYK 神奈川県横浜市中区海岸通3-9 (TEL.045-663-4677)
平成20年度東京五美術大学連合卒業・修了制作展
日時：2月19日(木)～3月1日(日)※2/24は休館
10:00～18:00
会場：国立新美術館 東京都港区六本木7-22-2

【大学院 美術研究科】

●博士後期課程美術専攻造形表現研究領域
「女子美術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程造形表現研究領域修了制作作品展」
日時：2月8日(日)～2月14日(土)
11:00～19:00(最終日：～17:00)
会場：ギャラリー青羅 東京都中央区銀座3-10-19

●修士課程美術専攻洋画研究領域1年
「女子美術大学大学院美術研究科美術専攻洋画研究領域修士1年作品展」
日時：1月25日(日)～1月31日(土)
11:00～19:00(最終日：～17:00)
会場：ギャラリー青羅 東京都中央区銀座3-10-19

●修士課程美術専攻洋画研究領域2年
「女子美術大学大学院美術研究科美術専攻洋画研究領域修士2年作品展」
開期：2月1日(日)～2月7日(土)
11:00～19:00(最終日：～17:00)
会場：ギャラリー青羅 東京都中央区銀座3-10-19

●修士課程美術専攻日本画研究領域
「START 大学院日本画修了生有志展」
日時：2月23日(月)～3月1日(日)
10:00～18:30(初日：13:00～、最終日：～17:00)
会場：東京銀座画廊 東京都中央区銀座2-7-18銀座貿易ビル (TEL.03-3564-1644)

●デザイン学科ヴィジュアルデザインコース有志卒業制作「SEKI展」
日時：3月20日(金)～3月24日(火)
11:30～19:00(最終日：～17:00)
会場：BankART Studio NYK 神奈川県横浜市中区海岸通3-9 (TEL.045-663-4677)

●デザイン学科ヴィジュアルデザインコース「卒業展」
日時：3月6日(金)～3月8日(日)11:00～20:00
会場：ラフォーレミュージアム原宿 東京都渋谷区神宮前1-11-6ラフォーレ原宿6F (TEL.03-3475-0411)
※芸術学部デザイン学科ヴィジュアルデザインコースは、2会場で開催予定。

●大学院 修了制作作品展
日時：3月9日(月)～3月20日(祝)10:00～17:00(入館は16:30まで)
会場：女子美アートミュージアム(相模原キャンパス内)
●芸術学部芸術学科卒業研究要旨発表会
日時：1月20日(火)～21日(水)10:00～
会場：相模原キャンパス2号館224教室

●修士課程美術専攻工芸(染・織)研究領域
日時：2月19日(木)～2月24日(火)
11:00～19:00(最終日：～17:00)
会場：PROMO-ARTE Project Gallery 東京都渋谷区神宮前5-51-3GALERIA 2F (TEL.03-3400-1995)

●修士課程デザイン専攻ファッション造形研究領域「まんだらのこころ」
日時：1月13日(火)～1月17日(土)10:00～17:00
会場：成願寺 東京都中野区本町2-26-6 (TEL.03-3372-2711)

【芸術学部】

●工芸学科
「女子美術大学芸術学部工芸学科染織陶硝子コース卒業制作展」
日時：2月20日(金)～3月1日(日)
11:30～19:00(最終日：～17:00)
会場：BankART Studio NYK 神奈川県横浜市中区海岸通3-9 (TEL.045-663-4677)

●立体アート学科「lady」
日時：3月5日(木)～3月9日(月)
11:00～18:00(最終日：～12:00)
会場：山脇ギャラリー 東京都千代田区九段南4-8-21 (TEL.03-3264-4027)

●デザイン学科ヴィジュアルデザインコース2009年女子美術大学ヴィジュアルデザインコース有志卒業制作「SEKI展」
日時：3月20日(金)～3月24日(火)
11:30～19:00(最終日：～17:00)
会場：BankART Studio NYK 神奈川県横浜市中区海岸通3-9 (TEL.045-663-4677)

●デザイン学科ヴィジュアルデザインコース「卒業展」
日時：3月6日(金)～3月8日(日)11:00～20:00
会場：ラフォーレミュージアム原宿 東京都渋谷区神宮前1-11-6ラフォーレ原宿6F (TEL.03-3475-0411)
※芸術学部デザイン学科ヴィジュアルデザインコースは、2会場で開催予定。

●芸術学部芸術学科優秀卒業研究
および大学院修士論文発表会
日時：3月15日(日)13:00～
会場：相模原キャンパス2号館224教室

●デザイン学科プロダクトデザインコース
「2008年度女子美術大学芸術学部デザイン学科プロダクトデザインコース卒業制作展」
日時：3月20日(金)～3月22日(日) 時間未定
会場：東京デザインセンター 東京都品川区東五反田5-25-19 (TEL.03-3445-1126)

●メディアアート学科「Palette」
日時：3月4日(木)～3月9日(月)
11:00～21:00(最終日：～19:00)
会場：横浜赤レンガ倉庫 神奈川県横浜市中区新港1-1-1 (TEL.045-2211-1515)

●ファッション造形学科
「女子美術大学芸術学部ファッション造形学科有志2008年度卒業制作展」
展示日時：2月7日(土)11:00～19:00
Fashion Show：2月8日(日)
時間：開場13:00～・開演13:30～
開場15:00～・開演15:30～
開場17:00～・開演17:30～
会場：BankART 1929 Yokohama 神奈川県横浜市中区本町6-50-1 (TEL.045-663-2812)

【短期大学部 造形学科】

●デザインコースクラフトデザイン系 陶芸・メタルデザイン「陶芸、金工、漆芸展」
日時：2月15日(日)～2月21日(土)
11:00～19:00(最終日：～17:00)
会場：ギャラリー青羅 東京都中央区銀座3-10-19美術家会館1F (TEL.03-3542-3473)

●デザインコースクラフトデザイン系 テキスタイルデザイン「卒業制作学外展」
日時：2月23日(月)～3月1日(日)
11:00～18:30(最終日：～16:00)
会場：銀座アートホール 東京都中央区銀座8-110高速道路ビル (TEL.03-3571-5170)

広報誌「女子美」の定期購読をご希望の方には毎月無料でお送りしております。ご希望される場合は、お送り先を広報入試課までご連絡ください。
また、広報入試課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせ下さい。
《広報入試課》 TEL. 042-778-6123
FAX. 042-778-6692
[E-mail] prs@joshibi.ac.jp

URL <http://www.joshibi.ac.jp>

発行 学校法人 女子美術大学
〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 企画部 広報入試課
制作・印刷 株式会社 日相印刷
監修 原田 松野
発行日 2009年1月16日